

### 3 株間によってキャベツの収穫期を調節

#### ねらいと成果

セル成型苗を使用したキャベツの年内どり、及び1～2月どり作型で、栽植密度が生育の速さや品質、収量に及ぼす影響を知るために、うね幅120cmを一定にし、2条植え栽培での株間を30cmから40cmまで2.5cmおきに変えて栽培を行った。

各作型とも収量は、32.5、35cmの株間が最も多く、40cmの株間では、35cm株間に比べて収穫時期を約10日早めることができた。

#### 内容

供試品種は、年内どりは「YR 泰山」、1～2月どりは「松波」で、うね幅は120cm、株間は30～40cmで2.5cmおきに変えて5段階とした。収穫時期は、1.3kgを越えるキャベツ（収穫可能球）が80%に達した時点とした。

供試した2品種について、栽植密度が定植から収穫までの生育日数に及ぼす影響を図に示した。

「YR 泰山」と「松波」では、収穫までの生育日数は異なるが、両品種とも株間を35cmから40cmまで広げると、生育日数は約10日減少し、逆に株間を35cmから30cmまで狭めると収穫までの生育日数は約30日増加した。

「YR 泰山」について、収穫可能株が80%に達した区から順に収穫を行い、栽植密度の違いが品質、

収量に及ぼす影響を表に示した。

株間32.5cmから40cmまでは、結球重は1400g前後でほとんど差はみられなかった。しかし、株間30cmでは結球重1196gとやや軽くなった。

結球重のばらつきをみるために、結球重の標準偏差を求めた。株間30cmと32.5cmでは標準偏差が300gを越えたが、株間35cmから40cmまでは200～250gであり、株間30cmおよび32.5cmでは、ややばらつきが大きかった。

10a当りの収量は、株間32.5cmと35cmが約7,000kgで大きく、次いで株間30cmの6,600kg、37.5cmの6,200kg、40cmの6,000kgと続いた。

以上のことから、株間を35cmから40cmに広げると、収穫時期は約10日早まり、球のそろいは良いが、収量は10a当り約1,000kg減少した。

#### 普及上の注意事項

前作の作付けや悪天候等により、定植時期をやむを得ず、遅らさなければならぬような場合、株間を広げることにより、収量性は多少犠牲にしても、収穫時期を早められる可能性がある。

株間と収穫時期の関係は、品種や栽培土壤の違いによって異なると考えられる。

竹川 昌宏（中央農技・園芸部）

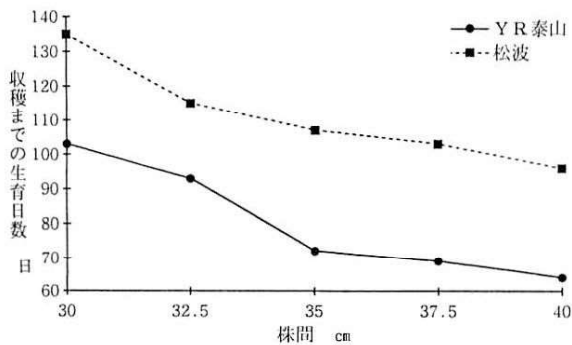


図 栽植密度（株間）が定植から収穫までの生育日数に及ぼす影響

注）定植日：「YR 泰山」8月20日、「松波」9月2日

表 「YR 泰山」の株間の違いが品質及び収量に及ぼす影響

株間 cm	調査日	結球重	結球重	球径 cm	最大葉 葉幅 cm	10a当* 収量 kg
		g	標準偏差 g			
40	10月30日	1458	257	19.5	36.9	6,075
37.5	10月30日	1399	205	18.9	35.3	6,218
35	11月6日	1483	248	19.0	34.8	7,062
32.5	11月27日	1401	345	18.6	32.6	7,185
30	12月3日	1196	317	17.9	31.2	6,644

注）結球重×栽植株数